



Book Talk

編集・発行 海南高校図書館
第12号 2012. 01. 31.

▼ 京極夏彦 氏

京極夏彦を読むにあたって困るのは、あの厚さである。本を読んでもいけば幸せな私には、寝る前にふと手にした本を読み切ってしまうまで眠らない、ということが頻繁に起こる。上下巻に分かれていても上中下巻に分かれていても同じこと。そんな私があんな分厚い本にひとたび手をつけたら、私の睡眠はきっと保障されない。そう思って京極夏彦を視界に入れないように過ごしてきた。ところが何年か前、生徒に「どうぞ」と目の前に『魍魎の匣』を置かれてしまったのだ。生徒が薦めてくれた本は読む主義だ。しかたがない、と腹を決めた。

『魍魎の匣』は『姑獲鳥の夏』を第1巻とするシリーズの第2巻で、このシリーズは現在『邪魅の雫』まで8巻が刊行されている。時代は戦後すぐ。主な登場人物は4名。刑事の木場、小説家の関口、探偵の榎木津、古本屋であり陰陽師の京極堂こと中禅寺。毎回このメンバーが難事件に巻き込まれるのだが、京極堂は「憑物落とし」と称してその難事件に直面する。起こる事件はいつも妖怪仕立てであり、一見論理が成り立たないような不条理なものである。京極堂の持論は「この世に不思議なことなど何もない」。妖怪を扱ってながらだ。その合理と非合理は決して矛盾しない。京極堂が両者を結びつけるとき、罪を犯してしまった者に憑いた物はきれいに落とされ、事件は収束する。ただ、妖怪によって、事件によって人の心に広がった波紋は消えないままである。そのため読後感がいいとは言えないかもしれない。とはいえ私たちの人生とは、そういうものではないだろうか。起こってしまったことを抱えながらも生きていくしかない私たちの弱さ、その弱さを認めないことには立ち行かないと知りながらも抗いたいやるせなさ、そんなものに向き合う勇気を京極堂は私たちに提示してくれる。

『魍魎の匣』シリーズよりは薄いか、と思いつつ読み始めた『巷説百物語』シリーズは、私の睡眠を削るには十分厚かった。『続巷説百物語』『後巷説百物語』『前巷説百物語』とシリーズは4巻で完結する（と思っていたら『西巷説百物語』が一昨年刊行され非常にうれしかった）のだが、時系列にすると第4巻が第1巻に続くので、1, 2, 3, 4, 1, 2, 3, 4, 1, 2・・・と無限ループを起こしてしまう。いつまで経っても読み終わることができない。こちらは基本的に江戸時代の話であり、主人公は山岡百介という町

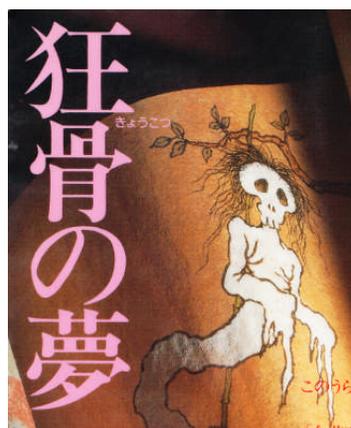
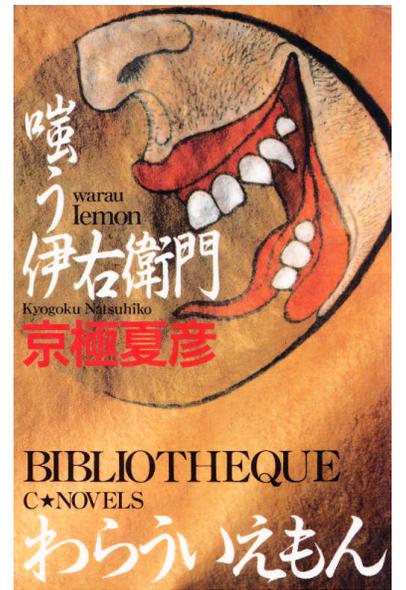


人である。彼は物書きの卵で、百物語を書こうと諸国を渡り歩き怪談奇談を集めている。『魍魎の匣』シリーズの京極堂と少々違う「世に不思議なし。世、凡て不思議なり」という考え方を持っている。その理由は、御行の又市たち小悪党一味が仕掛ける妖怪仕立ての不思議をつぶさに見てきたからだ。御行というのは白装束に身を包み、魔よけの札を売り歩くお坊さんのことであるが、又市には小股潜りという通称もあり、それは今で言う詐欺師に近い。又市たちは金で仕事を請け負い、正面切ってはどうにもならぬ確執や正攻法では晴らせぬ面倒事、世の非道をうまく収める。全てを妖怪の仕業に仕立て上げてしまうという、京極堂とは全く逆のやり方で問題に決着をつけるのである。舌先三寸口八丁の又市が語る江戸ことばに導かれ、つつい先へ先へと読んでしまう。個人的に特に好きなのは、常に先手を取る又市の仕掛けが格別に冴える第2巻『続』と、若かりし又市の青臭さが悲しい第4巻『前』である。

今夜も私は眠れない

堀先生（英語科）と京極ワールド

また、『嗶う伊右衛門』『数えずの井戸』などそれぞれ「四谷怪談」「番長皿屋敷」など古典の怪談を換骨奪胎したシリーズもある。こちらは元々の話が頭に入っているせいか、本の厚さはあまり気にならない。気にはならないだけで厚いのは事実でありやはり眠れないのだが、『巷説』シリーズの御行の又市が顔を出す場面もあり、「酒飲まずして何の浮世か」（『嗶う伊右衛門』）、「出来るのにせぬのは怠け者だ。出来ぬのに望むのは愚か者だ」（『数えずの井戸』）というような名言もあり、上記3シリーズの中では一番読みやすいと思われる。



辞書より厚いこともあって「レンガ本」だの「サイコロ本」だの言われる京極作品であるが、読書にかかる時間が長ければ、それはつまり私の幸せな時間が長いということだ。レンガ本、望むところである。

（英語科 堀 亜希子）

